

東アジアにおける有力姓氏とその発生要因

Popular Surnames in East Asia and Their Generating Mechanisms

金 光林

Guanglin JIN

要旨

世界の各国の姓氏について調べてみると、大概は少数の姓氏に人口が集中する現象が見られる。東アジアの場合もこのような現象は明確に現れる。

中国において人口が少数の有力な姓氏（大姓）への集中する要因は次のように考えられる。

（1）まずは、由緒があり、多様であり、広く分布していることに関連がある。（2）大姓は歴史上において国姓であることが多く、国の支配者の姓であるために当該王朝においては勢力を誇り、また王朝の支配者は賜姓という手段を使い、国姓を広めた。（3）門閥氏族制度は有力氏族増加の重要な要因となった。（4）中国の前近代の一夫多妻制により、社会的地位と経済的優越は子孫の生育にも有利に働き、名門氏族の子孫繁盛の土壌を作った。（5）家系を重んじる意識、同姓村落の形成、共同体内部での婚姻などの要因も、社会的に有力な姓氏への偏中を助長したと考えられる。

朝鮮（韓国）とベトナムの姓氏における有力な姓氏への集中現象にも中国と近似する要因が見られる。

日本の姓氏が中国、朝鮮、ベトナムのように数百程度に集約されず、約30万個もあるといわれるが、これについては次のような要因が考えられる。

（1）日本の姓氏は地名、職業名、物象名などに由来したが、その中の多数が地名に由来している。それぞれの地域の多様な地名に由来したために自ずと姓氏の数が多数になったと思われる。

（2）日本の家族制度は中国、朝鮮、ベトナムの場合に比べて血縁によって続くという意識が濃厚ではなく、そのため姓氏の分化が常に行われ、それが多数の姓氏に発展する素地となった。

（3）日本の政治体制が中国、朝鮮、ベトナムのような中央集権型ではなかったため、古代社会の場合を除くと、中央の政治権力による姓氏への影響力（王権により賜姓・改姓）が薄く、これも姓氏が多様化する一因にもなったと考えられる。

（4）明治時代に入り、「平民苗字必称義務令」が發布され、江戸時代までに公に苗字（名字）を名乗ることができなかった平民層も苗字を持つことが義務化されたために、極めて短期間に平民たちが馴染みのある地名から多数の苗字を新しく作ったことが日本の姓氏の数を増加させた。

キーワード 東アジア、有力姓氏（大姓）、国姓、社会制度

1. はじめに

世界の各国の姓氏について調べてみると、大概は少数の姓氏に人口が集中する現象が見られる。東

アジアの場合もこのような現象は明確に現れる。

2010年に中国政府が行った第6次全国人口センサスによると、中国の人口は約13億7千万人と統計されているが、その中で王、李、張、劉、陳、

楊、黄、趙、周、呉の人口順位の上位10位に入る姓氏の人口が約5.4億人であり、上位5位の王、李、張、劉、陳の姓氏だけ4億人近い人口になっている¹。

韓国の2000年の人口センサスによって確認された人口数の上位10位までの姓氏は金、李、朴、崔、鄭、姜、趙、尹、張、林の順であり、この上位10位までの姓氏の人口が韓国の人口約4500万人の中で64.1%を占め、金、李、朴の上位3位の姓氏の人口が44.9%を占めるという²。

2005年の統計によると、ベトナムで人口数の多い14の姓氏は阮、陳、黎、範、黄、潘、武、鄧、裴、杜、胡、呉、楊、李であり、これらの14の姓氏がベトナムの人口数の85%を占めるという。特に上位3位までの阮、陳、黎の姓氏だけでベトナム人口の約58%を占めるという³。

日本の姓氏（名字）は約30万と言われ、中国・韓国・朝鮮・ベトナムほど有力姓氏の占める人口の割合が高いとは言えないが、それでも佐藤、鈴木、高橋、田中、伊藤、渡辺、山本、中村、小林、加藤の上位10位の姓氏が日本の人口の10%を占めると言われている⁴。

本稿においては、東アジアの中国、韓国・朝鮮、ベトナム及び日本における有力（またはポピュラーな）姓氏への集中現象に着目し、それぞれの国における姓氏の変遷史を辿りながら、姓氏の集中現象の発生要因を究明し、社会制度としての姓氏の本質に迫りたい。

¹ 2010年に中国政府が行った第6次全国人口センサスによる姓氏順位とその人口に関する統計は中国政府の公式統計ではないが、国家統計局人口就業司のスタッフ武潔、楊建春が『国家統計』2014年第6期に人口数上位の姓氏順位を発表している。本稿では、この論文の統計資料に基づいている。

² 2000年の韓国政府の人口センサスによる姓氏順位とその人口に関する統計は、韓国のフリー百科事典『斗山百科』(<http://www.doopedia.co.kr/>)に掲載された「韓国の姓氏制度」項目による。

³ フリー百科事典『Wikipedia』の「Vietnamese name」(http://en.wikipedia.org/wiki/Vietnamese_name)の項目による。『Wikipedia』におけるベトナムのポピュラーな14の姓氏とその姓氏がベトナム人口に占める割合の根拠はLê Trung Hoa, *Họ Và Tên Người Việt Nam* (Vietnamese Family and Personal Names, Social Sciences Publishing House, 2005)による。

⁴ ウェブサイト『名字由来ネット』(<http://myoji-yurai.net/>)の統計による。日本人の名字が約30万個に近いと知られており、上位10位の名字については資料によって異なる場合がある。

2. 中国における有力姓氏

中国の姓氏の発展過程を辿ってみると、王朝ごとに有力な姓氏が存在していたことが分かる。

中国の姓氏の発展過程における最初の有力な姓は姫氏である。伝説上の漢民族の始祖である黄帝に由来したと言われる姫氏は、周朝の国姓であり、西周の分封制により姫氏に由来する諸侯が多数現れた。しかし、西周時代に天子による「賜姓命氏」により、この時期に中国の姓氏は大量に生まれた反面、国姓である姫氏が大幅に増加することはなかった。

周朝以降、有力な王朝である漢朝においては、劉氏が国姓になり、大幅に増えた。漢朝建立以来の分封政策、功臣への賜姓政策によって劉氏が増加し、和親政策によって匈奴など少数民族が劉氏を名乗ったことも増加の一因となった。東漢時代には、外戚の影響力が強まり、外戚の姓も増加し、中でも梁氏の増加が目立った。しかし、梁氏は後に没落した。

魏晉南北朝時代には、王朝の交代が頻繁で、周辺の異民族（少数民族）が中原に入り政権を建てるが多かったために、それぞれの王朝の国姓が大幅に増加し、大姓になることはなかった。それに反して、東漢時代から台頭した有力な豪族たちの姓が大幅に増加した。魏晉時代には王氏が特に増加し、東晉においては「王与馬、共天下」といわれるほどに王氏が国姓である司馬氏を凌ぐ有力な姓氏となった。

南北朝時代の大家の事情はやや複雑になった。東晉においては、司馬氏の王族とともに南遷した「僑姓」と呼ばれた王、謝、袁、肅の4姓が大家となり、東南部では土着の「呉姓」と呼ばれた朱、張、顧、陸が大家となり、北方の山東では「郡姓」と号した王、崔、盧、李、鄭が大家となった。他にも関中でも「郡姓」と号した韋、裴、柳、薛、楊、杜が大家となり、漢姓を名乗った北方異民族の「虜姓」である一元、長孫、宇文、宇、陸、源、竇が大家となった⁵。

隋朝の国姓は楊氏であるが、王朝が短命に終わり、有力な姓氏までには至っていない。

⁵ 南北朝時代の地域別の大家については『新唐書』「柳沖伝」に記述が見える。

唐朝の国姓は李氏であり、李氏は大姓の一つであるが、むしろこの時代には民間では崔氏がもっとも多かった。そのために唐太宗が高士廉に編纂させた『氏族志』に第一位に崔氏が上がった。唐代には、崔、蘆、李、鄭が特に門閥が高い姓氏となり、王氏を加えて唐代の五大姓氏となった。

宋朝の国姓は、趙氏であり、この時代には、趙、錢、孫、李、周、呉、鄭、王が有力な大姓であった。

元朝には、皇族がモンゴル人であり、姓を名乗る習慣が定着しなかったために、国姓が存在せず、張、王、劉、李、趙がこの時代の漢民族の大姓であった。

明朝には、それまでポピュラーでなかった朱氏が国姓である理由から急速に増加した。それでもこの時代の漢民族の大姓の順位は王、陳、張、劉、郭、呉、楊、李、胡、朱であり、朱氏がもっとも有力な姓氏にはなれなかった。

清朝の漢民族の大姓は、陳、李、張、黄、何であり、清王朝は意識的に孔子に由来する孔氏を漢民族の第一大姓と規定したが、人口の上では前者には及ばなかった。

姓氏に関しては、知識の普及を目指し、宋代に『百家姓』（504氏収録）、明代の『皇明千家姓』（1,968氏収録）、清代の『御制百家姓』などが編纂されたが、ポピュラーな姓氏は凡そ収録したものの、韻文として構成され、『百家姓』では国姓の趙氏を第一姓とし、『皇明千家姓』では国姓である朱氏を第一姓とし、『御制百家姓』では清王朝が孔子を崇敬したことから孔氏を第一姓にするなど、王朝による政治的意図と編者の地域的特色が反映されたために、人口数の順位を正確には伝えられなかった。

中国科学院遺伝及び発育生物学研究所の袁義達研究員と彼が率いる研究グループが2007年に歴史文献と国際上で通用する姓氏頻率に関する研究方法を駆使して行った調査によると、中国の宋代、元代、明代の人口数の上位10位に入る姓氏はそれぞれ次の通りであった⁶。

宋代:王、李、張、趙、劉、陳、楊、呉、黄、朱
元代:王、張、李、劉、陳、趙、呉、楊、黄、周
明代:王、張、李、陳、劉、楊、呉、黄、周、徐

現在の中国における人口数の多い姓氏の順位については、時期別に複数の調査結果が出ている。中国科学院の杜若甫・袁義達研究員らのグループが1987年に1982年の中国政府の第3次人口センサスの結果に基づき、57万人あまりの姓氏をサンプルに、そして1970年に台湾で出版された『台湾地区人口の姓氏分布』を参考に人口数の多い姓氏の順位を調査したが、上位20位は李、王、張、劉、陳、楊、趙、黄、周、呉、徐、孫、胡、朱、高、林、何、郭、馬、羅であった。

この研究によって、中国の漢民族の姓氏には、大姓と希少姓との格差が大きく、大姓に人口が集中し、姓氏の地域分布にも差異が現れていることが分かってきた。

この研究によると、上位3位に入る李、王、張の姓氏はそれぞれ当時の中国人口の7%を超え、これら三つの姓氏の人口が約2.7億人に達し、上位19位までの姓氏が人口の55.6%を占め、上位100位までの姓氏が人口の87%を占める。姓氏の地域分布の差異も明らかで、北方地域では、王、李、張、劉の順位であり、南方地域では、陳、李、黄、林、張の順位であり、北方と南方の間に位置する長江流域では、李、王、張、陳、劉の順位である。他にも、北方では、趙、孫、馬、劉が南方より多く、南方では、朱、呉が北方より多いし、各省ごとに地域に多い姓氏が存在することも分かった。例えば、広東の梁、羅、広西の梁、陸、福建の鄭、台湾の蔡、安徽の汪、江蘇の徐、朱、浙江の毛、沈、江西の胡、廖、湖北の胡、湖の譚、四川の何、鄧、貴州の呉、雲南の楊、河南の程、甘肅の高、寧夏の万、陝西の薛、青海の鮑、新疆の馬、山東の孔、山西の董、郭、内モンゴルの潘、東北三省の于などがそれである⁷。

他にも、1982年に中国文字改革委員会と山西大学が1982年の全国の第3次人口センサスの統計資料に基づき、コンピューターを駆使し、北京、福建、広東、遼寧、四川、上海、陝西地域の174,900人の姓名のサンプルを調査した結果によると、人口数の多い姓氏の上位20位は

王、陳、李、張、劉、楊、黄、呉、林、周、叶、趙、呂、徐、孫、朱、高、馬、梁、郭であった。

⁶ 袁義達・張誠著『中国姓氏—群体遺伝と人口分布』（華東師範大学出版社、2002年）の21-49頁による。

⁷ 同上書、49-57頁による。

2007年に中国公安部が全国の戸籍人口に対する統計に基づいて算出した人口数の多い姓氏の上位20位は

王、李、張、劉、陳、楊、黄、趙、呉、周、徐、孫、馬、朱、胡、郭、何、高、林、羅であった。この中で、第1位を占める王氏の人口は9,288.1万人であり、中国の総人口に占める比率が7.25%であった⁸。

2010年に中国政府が行った全国人口センサスに基づき、国家統計局人口就業司のスタッフ武潔、楊建春が『国家統計』2014年第6期に発表した人口数による姓氏順位はすでに述べているが、第1位の王氏が人口数、9,468万人、人口比率7.10%、第2位の李氏が9,276万人、人口比率6.96%、第3位の張氏の人口数8,550万人、人口比率6.42%、第4位の劉氏の人口数6,882万人、人口比率5.16%、第5位の陳氏が5,673万人、人口比率が4.26%である。上位五つの姓氏だけで中国の総人口の39.9%を占めている。

中国の姓氏順位の統計においては、第1位が王氏と李氏で入れ替わる場合があるが、これは両者の人口数の差が大きいからであると考えられる。

以上のように中国において人口が少数の大姓への集中する要因は次のように考えられる。

(1) まずは、由緒があり、多様であり、広く分布していることに関連がある。

中国随一の大姓である王氏の事例を調べてみると、王氏だけでも中国の伝説上の始祖である黄帝の子孫、虞舜の子孫、殷の王子比干の子孫、匈奴ら複数の異民族の王族の子孫というそれぞれ源流があり、王姓は周代の王族、諸侯である姫氏、嬀氏、子氏から由来し、名門貴族を示す郡望堂号も数多くある。王氏の源流は伝承の上では帝王諸侯へとつながり、王氏はいずれもその子孫ということになる。帝王諸侯の子孫ということを確認に示していることがおそらく王氏が広範に広がり、人口数が増加した重要な要因であろう。

(2) 大姓は歴史上において国姓であることが多かった。国の支配者の姓であるために当該王朝においては勢力を誇り、また王朝の支配者は賜姓と

いう手段を使い、国姓を広めた。国姓または名門の大姓には税金と賦役において優遇措置が取られることもあったので、これらの姓氏は経済的にも恵まれた。そのために国姓は当該王朝においても大概人口の急速な増加が見られた。いわゆる人口学上の「マタイ効果」である。例えば、中国の大姓の中で、李、劉、趙は歴史上においていずれも複数の王朝を建立し、そのことによってこれらの姓氏が大幅に増加したことは間違いない事実である。

(3) 門閥氏族制度は有力氏族増加の重要な要因となった。

門第とは中国の封建時代の貴族階級の氏族的等級のことである。秦漢以来、中央集権の政治制度の確立によって西周時代に実施していた「世卿世禄」という世襲的氏族の等級制は廃止になったが、政治的・経済的に優位に立つ少数の氏族に権力が集中し、「門第」と呼ばれる門閥が形成された。三国時代の魏朝が「九品官人法」または「九品中正制」を実施し、官吏を選ぶ権限をいわゆる上品の名門氏族に与え、名門氏族に官吏への登用が保障された。

南北朝時代に、南方では北方から晋の王室と一緒に移転してきた王、謝、袁、肅の4氏が「僑姓」として最高の名門に数えられ、北方では、王、崔、蘆、李、鄭が「郡姓」と呼ばれる名門大姓であった。魏晋南北朝から隋・唐の時代に至るまで門閥制度が盛行し、名門氏族の門閥意識は皇帝をも凌ぐほどであった。この時代には「門第」以外に「郡望」も重視された。有力な姓氏である王氏と張氏が国姓ではなかったにも関わらず、人口の増加が著しかったのは、この門閥制度との関連が深い。

(4) 中国の前近代の一夫多妻制により、社会的地位と経済的優越は子孫の生育にも有利に働き、名門氏族の子孫繁盛の土壌を作った。

(5) 家系を重んじる意識、同姓村落の形成、共同体内部での婚姻などの要因も、社会的に有力な姓氏への偏中を助長したと考えられる。

3. 朝鮮における有力姓氏

韓国での2000年の人口調査によって確認された人口数が多い10位までの姓氏は金氏、李氏、朴氏、崔氏、鄭氏、姜氏、趙氏、尹氏、張氏、林

⁸ 1982年に中国文字改革委員会と山西大学が行った姓氏順位の統計と1997年に中国公安部が行った姓氏順位の統計は中国語版フリー百科事典『wikipedia』(<http://zh.wikipedia.org/>)の「中国姓氏排名」項目からの引用である。

氏の順であり、人口数が多い10位までの本貫は金海金氏、密陽朴氏、全州李氏、慶州金氏、慶州李氏、慶州崔氏、晋州姜氏、光山金氏、坡平尹氏、清州韓氏の順であった⁹。この中で、始祖の中国出自を名乗る氏族は趙氏、張氏、林氏、清州韓氏であるが、このようないわゆる外来姓氏より土着の姓氏が人口数の上では絶対的に多い。事実、高麗時代後期から朝鮮王朝時代にかけて始祖が外部から移住してきた外来姓氏はほとんど稀少な姓氏であって人口数も比較的少ない。趙氏、張氏、林氏、清州韓氏などのような人口数が多い姓氏も始祖たちの中国出自説を名乗るが、それが確実な事実である可能性はそれほど高くないはずである。このように見ると、朝鮮の姓氏の中で外来姓氏がほとんど半分くらいに及びながらも実際の人口数では外来姓氏が多数を占めていないことが分かる。

朝鮮の文献記録によって前近代の大姓について調べると次の通りである。

『高麗史』(1451)に登場する人物を姓氏別に統計した資料によると、高麗王族と外国人を除き、官僚を多く輩出した16位までの姓氏の順位は李、金、崔、朴、鄭、王、尹、韓、柳、宋、張、安、洪、林、呉、権であり¹⁰、間接的な資料であるが、これらの姓氏が当時の社会で有力であったことを裏付ける。

また、高麗時代前期の代表的な門閥貴族は、仁川李氏、慶州金氏、海州崔氏、開城王氏、平山朴氏、慶州崔氏、江陵金氏、貞州柳氏、水原崔氏、利川徐氏などである¹¹。

朝鮮で最初に姓氏について体系的に整理した文献である『世宗実録』「地理志」(1454)の「姓氏条」には、収録された265個の姓氏について、「天降姓」「賜姓」「土姓」「属性」「入姓」「投化姓」などに分類し、全国の姓氏を地域別に列挙している。この記録には当時の人口数による姓氏の順位は直接的には示されていない。

朝鮮王朝時代の官僚を務めた李宜顕(1669-1745)が著した『陶谷叢説』の「雑著編」に朝鮮の289個の姓氏について「著姓」「希姓」「僻姓」

「複姓」の四つに分類した。ここで「著姓」とは人口数の多いか、社会的に影響力の大きい姓氏を、「希姓」「僻姓」とは人口数の少ない姓氏、「複姓」とは複字姓を指すものである。

「著姓」としてまず次の12個を上げている。

李、金、朴、鄭、尹、崔、柳、洪、申、権、趙、韓次に「次之」としての「著姓」16個を上げている。

呉、姜、沈、安、許、張、閔、任、南、徐、具、成、宋、兪、元、黄

他にも、「又次之」としての「著性」25姓を上げているが、これらの中には現代の韓国の人口数の多い姓氏がすべて網羅されている。

1930年に朝鮮総督府が朝鮮で実施した国勢調査に基づいた、人口数による姓氏順位は金、李、朴、崔、鄭、趙、姜、張、韓、尹、呉、林、申、安、徐、黄、洪、全、権、柳、高、文の順位であった¹²。

1985年に韓国政府が行った人口センサスに基づき、姓氏と本貫について統計した結果、274個の姓氏と3435個の本貫が確認され、人口数による姓氏上位20位は

金、李、朴、崔、鄭、姜、趙、尹、張、林、韓、申、呉、徐、権、黄、宋、安、柳、洪であり、本貫別人口数の上位10位は

金海金氏、密陽朴氏、全州李氏、慶州金氏、慶州李氏、晋州姜氏、慶州崔氏、光山金氏、坡平尹氏、清州韓氏であった。

ここで、人口数の上位3位の金氏(8,785,554人)、李氏(5,985,037人)、朴氏(3,435,640人)だけで当時の韓国人口約4千万人の半分に近い数に及んだ¹³。

2000年に韓国政府が行った人口センサスに基づき、姓氏と本貫について統計した結果、286個の姓氏と4,179個の本貫が確認され、人口数による姓氏上位20位は

金、李、朴、崔、鄭、姜、趙、尹、張、林、呉、韓、申、徐、権、黄、安、宋、柳、洪であり、本貫別人口数の上位10位は

金海金氏、密陽朴氏、全州李氏、慶州金氏、慶州李氏、晋州姜氏、慶州崔氏、光山金氏、坡平尹

⁹ 以上の統計資料は韓国のウェブサイト『斗山百科』(<http://www.doopedia.co.kr/>)に掲載された「韓国の姓氏制度」による。

¹⁰ 李樹建著『韓国の姓氏と族譜』(ソウル大学校出版部、2003)の267頁による。

¹¹ 同上書、272頁による。

¹² 韓国の『京郷新聞』1967年12月13日付けの記事「我が国の姓氏合計326種」による。

¹³ 李樹建著『韓国の姓氏と族譜』(ソウル大学校出版部、2003)の345-348頁による。

氏、清州韓氏であった。

ここでも、人口数上位3位の金氏(9,925,949人)、李氏(6,794,637人)、朴氏(3,895,121人)だけで当時の韓国人口(45,985,289人)の44.9%を占めた¹⁴。

以上の統計からは朝鮮(韓国)の姓氏における大姓への集中傾向が明確に現れている。

朝鮮(韓国)の姓氏における大姓、または有力な姓氏への集中現象の要因は次のように考えられる。

(1)『世宗実録』『地理志』(1454)以来、朝鮮における姓氏の区分は、「天降姓」(新羅・伽倻の王族の姓の「金」「朴」「昔)、「賜姓」(国王から賜った姓)、「土姓」(土着上流階級の姓)、「属姓」(社会的地位の低い者の姓)、「入姓」(他所から移住してきた者の姓)、「投化姓」(外国から帰化した姓)に分け、中でも「天降姓」、「賜姓」を上位に置く傾向が見られた。「天降姓」は始祖の神話伝説と遡り、朝鮮において最も権威と由緒のある姓氏であり、「賜姓」は新羅の6部族の貴族に与えた李、崔、孫、鄭、裴、薛と高麗初期に建国者王建が与えた姓氏を主に指し、「天降姓」に次いで由緒のある姓氏である。この両者のカテゴリーに入る姓氏が朝鮮の大姓となることが多かった。中国の場合と同じく、朝鮮でも帝王と貴族に由来する姓氏は社会的に有力であり、姓氏の普及過程でそういう姓氏は人口増加に有利であった。

(2) 朝鮮の姓氏の普及過程で、新羅、伽倻、朝鮮王朝(李朝)の国姓と関連する姓氏(「金」、「朴」)が朝鮮の姓氏の主流を占めるようになり、王朝が他の勢力によって滅亡された高句麗、百濟、高麗の国姓と関連する姓氏(「高」「扶余」「王」)は増加しなかったか、または減少したのである。

(3) 新羅時代の「骨品制」、朝鮮王朝時代の「兩班」制度に現れるように、貴族意識と門閥意識が有力な姓氏への集中を加速させ、16世紀末以降の姓氏の大衆化の過程において有力姓氏を名乗る「冒姓」現象が現れ、1894年の「甲午更張」による近代的身分解放と1909年の民籍法の実施時期

に、これまでの無姓層が「金」「朴」「李」などの有力姓氏を名乗る現象が深化した。

(4) 前近代社会の一夫多妻制も政治的・経済的に有力な姓氏の人口を増加させたと考えられる。

4. ベトナムにおける有力姓氏

ベトナムの姓氏については、研究資料の不足、筆者の言語力の制限によりその詳細を明らかにすることは難しいが、凡その状況を述べると次の通りである。

ベトナムも多数の民族から構成される多民族国家であるため、ここでは中国の漢民族の場合と同じく、ベトナムの総人口のうち圧倒的比率を占めるベト族(キン族)(1989年の人口センサスによると、総人口凡そ6,500万人のうち86.8%を占めるという¹⁵)の姓氏についてベトナムを代表する姓氏として論じたい。

ベトナム人の姓氏は約200個程度(すべての民族の姓氏の合計が約769個¹⁶)だと言われている。

本稿の序文ですでに述べたとおり、2005年の統計によると、ベトナムで人口数の多い14の姓氏は阮、黎、範、黄、陳、潘、武、鄧、裴、杜、胡、呉、楊、李であり、これらの14の姓氏がベトナムの人口数の約90%を占めるという。この中で特に阮氏・黎氏・範氏・黄氏だけでベトナムの人口の半分以上を超えることになる。特に阮氏はとりわけ多く、この姓氏はベトナムの北部では人口の約48%を占め、南部では約28%を占めるという調査結果も出ているという¹⁷。

阮氏の人口が非常に多い理由は次の二つにあると言われている。一つは、陳朝期(13世紀初頭～15世紀初頭)に全王朝の国姓である李氏を名乗ることが禁止され、阮氏への改姓が強制されたことである。もう一つは、阮朝期(19世紀初頭～20世紀中葉)に、黎朝の重臣であった鄭氏の姓を名乗っていた人々が阮王朝の報復を恐れ、阮氏に改姓したことである。

これらの姓氏はベトナムにおける歴代の王朝の国姓の場合が多く、始祖の起源を中国に求めるこ

¹⁴ 以上の統計資料は韓国のウェブサイト『斗山百科』(<http://www.doopedia.co.kr/>)に掲載された「韓国の姓氏制度」と韓国語版フリー百科事典『wikipedia』(<http://ko.wikipedia.org/>)の「大韓民国の人口順姓氏目録」項目による。

¹⁵ 松本脩作・大岩川嫩編『第三世界の姓名一人の名前と文化』(明石書店、1994)の148頁。

¹⁶ 同上書、150頁による。

¹⁷ 同上書、150頁による。

とも多い。ベトナムの姓氏における人口数の上位を占める阮、黎、陳、胡、呉、李氏らの姓氏が、いずれもベトナムの歴代の王朝の国姓である。王権の持つ政治的影響力と国王からの賜姓によって国姓はベトナムにおいても最も有力な姓氏になりやすかった。

中国のウェブサイト¹⁸に発表された「朝鮮、韓国、ベトナムには何故中国式姓氏が多いのか」という論文¹⁸においては、ベトナムの複数の王朝の建国者、またはその始祖は中国人の子孫だという主張がなされている。具体的に名前が上がっているのは、呉朝の呉権（河北省の出身）、丁朝の丁部領（広東省の出身）、前黎朝の黎恒（四川省の出身）、李朝の李公蕴（福建省の出身）、陳朝の陳日昷（福建省の出身）、胡朝の胡季犛（浙江省の出身）、鄭朝の鄭檢（福建省の出身）、阮朝の阮福映（福建省の出身）である。これらの王朝の建国者、またはその祖先が中国人の子孫という伝承はおそらくベトナム、または中国側の文献に伝わると思われるが、これは歴史事実である可能性がある一方、朝鮮の姓氏の場合もそうであるが、始祖が中国に起源すると言われる場合の多くが実際の事実とは関連がなく、中国の漢民族と同じ姓氏を使うことによってベトナムにおけるそれぞれの姓氏の始祖が中国に起源すると言われてきた可能性も高い。

5. 日本における有力姓氏

ここで、日本の時代別の有力な姓氏について調べることにしたい。

古代の氏姓制度の中で有力な氏族といえば、中臣、蘇我、大伴、物部、海部などである。

中臣氏は神職を職業とする豪族で、この氏族から伊勢、大田、大家、葛野など10数種の大族に分れ、鎌足が天智8年（669）に姓氏を藤原に改めると、藤原氏が他氏を圧倒して以後、平安時代まで権勢を振るった。

蘇我は土地を開拓し、農耕を中心とした豪族で、大和国高市郡の地名に由来し、物部氏を滅ぼして

馬子の時代まで権勢を振るったが、大化の改新のときに滅んだ。蘇我蝦夷の弟倉麻呂の子などの傍系が後世にも栄えた。

大伴氏は天皇に随従する武族の出身で、物部氏、曾我氏と権力を三分にしたが、藤原氏が実権を握ると衰亡に向った。弘仁14年（822）に淳和天皇の諱を避けて大伴を伴氏に改めた。

物部氏は用具・武器その他の生産に従事した豪族で、蘇我氏とに対抗で物部守屋が蘇我馬子に殺されてから朝廷内で勢力を失った。

海部の原義は海と関連し、この氏族は海洋生活と関係があったようである。

平安時代以降になると、「源平藤橘」と呼ばれた源、平、藤原、橘の4氏族が政権の中枢につき、この四つの姓氏から多くの姓氏が派生し、俗に日本人の系譜を遡れば、ほとんどが「源平藤橘」に行き着くといわれるほどである。武家社会においては大半の武士が「源平藤橘」の子孫と名乗ったため、近代に苗字が普及する過程で多くの苗字と家系図が「源平藤橘」と関連を持つようになった。例えば、織田信長が桓武平氏、豊臣秀吉が藤原氏の子孫、徳川家康が清和源氏の子孫を名乗ったことがその典型的な事例であり、この場合はいずれも詐称と見られている。

源氏は天皇家の分家が皇族を離れる際に賜った姓氏で、弘仁5年（814）に嵯峨天皇の皇子が「源」の姓を賜ったことに由来する。源氏は嵯峨天皇から生まれた嵯峨源氏以外にも、清和源氏、村上源氏など21の源氏流派が生まれ、源氏から派生した現代の日本の苗字は1000個以上もあると言われる¹⁹、大阪府、石川県、富山県に多いと言われる。

平氏は源氏誕生から少し遅れた天長2年（825）に桓武天皇の子孫が平姓を賜ったのに由来する。平氏も桓武平氏、仁明平氏、文徳平氏、光孝平氏などの流派があるが、桓武平氏が最も繁栄した。平氏と関連する現代の日本の苗字は東北に多いと言われる。

藤原氏は大化の改新の後、中臣鎌足が天智天皇から藤原姓を賜ったことに由来する。藤原氏は奈良時代にさらに四家に分家し、後に多数の苗字がこの姓氏から派生した。

¹⁸ 中国河南省炎黄姓氏文化基金会のウェブサイト (<http://www.yhxsw.com>) に掲載された中国語名「朝鮮、韓国、越南何為有那么多中国姓氏」（同サイトに2013年4月22日付けに掲載された署名なしの文章）においてこのような主張がなされている。

¹⁹ 森岡浩著『分布とルーツがわかる苗字地図』（日本実業出版社、2004）、94頁。

橘氏は6世紀後半の敏達天皇の子孫にあたり、奈良時代の諸兄が祖である。橘氏は源氏、平氏、藤原氏に比べて子孫が少ない。兵庫県に関連する姓氏が多いと言われる。

日本の姓氏研究家丹羽基二氏が調べたところによると、現代日本の人口数の多い十大姓の佐藤、鈴木、高橋、伊藤、渡辺、斎藤、田中、小林、佐々木、山本のルーツが、藤原、源氏、平氏の流れを汲む場合が多く、さらに現代日本の人口数の多い百大姓もルーツも藤原、源氏、平氏に行き着く場合が多い²⁰。もちろん、これは血縁的なつながりのない場合が多数であり、名門貴族を羨望する社会現象の現われである。

日本の姓氏においては、天皇家に由来する姓氏が多く、また伝承上の始祖が記紀神話の神々に遡ることが多い。このような現象は、中国の漢民族の姓氏の主流が伝説上の三皇五帝に遡り、朝鮮の有力な姓氏が古代王国の神話伝説に遡ると一脈相通する。東アジアの中国、朝鮮、ベトナムの方式に日本の国姓を求めれば、天皇家が国姓の大本ということであろう。

それにしても日本の姓氏が中国、朝鮮、ベトナムのように数百程度に集約されず、約30万個²¹もあるということはどう理解すべきか。これについては次のような要因が考えられる。

(1) 日本の姓氏は地名、職業名、物象名などに由来したが、その中の多数が地名に由来している²²。それぞれの地域の多様な地名に由来したために自ずと姓氏の数が多数になったと思われる。

(2) 日本の家族制度は中国、朝鮮、ベトナムの場合に比べて血縁によって続くという意識が濃厚ではなく、そのため姓氏の分化が常に行われ、多数の姓氏に発展する素地となった。

(3) 日本の政治体制が中国、朝鮮、ベトナムのような中央集権型ではなかったため、古代社会の場合を除くと、中央の政治権力による姓氏への

影響力（王権により賜姓・改姓）が薄く、これも姓氏が多様化する一因にもなったと考えられる。

(4) 明治時代に入り、近代国家の納税、徴兵など国民管理の必要性により明治3年（1870）の「平民苗字許可令」、明治8年（1875）の「平民苗字必称義務令」が公布され、江戸時代までに公に苗字（名字）を名乗ることができなかった平民層も苗字を持つことが義務化されたために、極めて短期間に平民たちが馴染みのある地名から多数の苗字を新しく作ったことが日本の姓氏の数を増加させた。近代初期に朝鮮でも戸籍制度が法律として成立し、それまで姓氏を持たなかった平民が姓氏を持つことを義務化された際、社会的に有力な姓氏である金、朴、李を名乗ることが多く、それによって少数の姓氏に集約されたのとよい対照をなす。

参考文献

- 巫聲恵編著『中華姓氏大典』（河北人民出版社、2000）
 何曉明著『姓名与中国文化』（人民出版社、2001）
 張連芳主編『中国人の姓名』（中国社会科学出版社、1992）
 籍秀琴著『中国姓氏源流史』（文津出版社、1997）
 楊復竣著『中国伝統文化の根—中国本源文化伏羲文化・中国姓氏史』（上海大学出版社、2010）
 王大良主編『中国的百家姓』（百花文芸出版社、2003）
 袁義達・張誠著『中国姓氏—群体遺伝と人口分布』（華東師範大学出版社、2002）
 郭讓舜著『中国人の姓名—姓名の由来と名前の取り方』（安徽人民出版社、2000年）
 崔徳教・李勝羽編『韓国姓氏大観』（創造社、1985）
 片泓基著『韓国の姓氏発生史及び氏族別人物史』（良賢齋、1999）
 金正賢著『興る姓氏滅びる姓氏』（朝鮮日報社、2001）
 李樹建著『韓国の姓氏と族譜』（ソウル大学校出版部、2003）
 太田亮著『姓氏と家系』（創元社、1941）
 『日本姓氏家系総覧』（別冊歴史読本・事典シリーズ第11号）（新人物往来社、1991）
 『日本を知る姓氏と苗字』（別冊歴史読本20号）（新人物往来社、2002）
 森岡浩著『分布とルーツがわかる苗字地図』（日本実業出版社、2004）
 島村修治著『世界の姓名』（講談社、1977）
 松本脩作・大岩川嫩編『第三世界の姓名—一人の名前と文化』（明石書店、1994）
 金光林著「姓氏の発生と祖先意識及び神話伝説」（権寧俊編『歴史・文化からみる東アジア共同体』、創土社、2015）に所収

²⁰ 丹羽元二著『姓氏・地名・家紋総合事典』（新人物往来社、1988）、24—45頁。

²¹ 丹羽基二著『地名苗字読み解き事典』（柏書房、2002）、40頁。ここで、丹羽氏は現代日本の姓氏の苗字を約29万2000個ほど算定し、新しい苗字がつねに生まれる事情を考えて約30万という表現を取っている。

²² 丹羽基二著『姓氏・地名・家紋総合事典』（新人物往来社、1988）では、日本の姓氏の8割から8分が地名に由来すると推定している。同書16頁。